

享楽人またはフマニストとしての木下杢太郎  
KINOSHITA Mokutaro as an epicurean or a humanist

橋秀文（神奈川県立近代美術館主任学芸員）

---

詩人、医学者、美術史家、キリシタン史研究家など多方面で活躍した木下杢太郎（本名：太田正雄、1885－1945）は、高校時代に画家を志し、その後も文学者を夢見たにもかかわらず、その都度、親族の反対に押し切られ、東京帝国大学医学部医学科を経て、医学の道を歩んでいる。

1908（明治41）年から1912（明治45・大正元）年にかけて耽美主義運動「パンの会」に参加し、東京を巴里に、隅田川をセーヌ河に見立て、さらに、古き良き時代の江戸を憧憬して、青春を謳歌したのがこの時代の杢太郎であった。

1916（大正5）年、旧満州の大学病院に勤務。この頃、奈良に立ち寄り仏教美術を研究、その後、日本の仏教美術の源泉を求めて朝鮮、中国、さらに中央アジアへと関心を広げ、実際に朝鮮、旧満州、中国の古美術を見て回る旅を行った。そして、この時期の関心事がシンボリックに表現されたのが、詩集『食後の唄』（1919年刊行）の挿図《無題（仮：技芸女神）》である。

杢太郎が医学の研究を主目的としてパリに留学したのは、1921（大正10）年のこと、そして1923（大正12）年、関東大震災が起きる。この時、東京に保管していたアジア美術関係の文献がすべて灰燼に帰したことを伝え知った杢太郎は、研究方針を東洋美術から日本とヨーロッパのキリシタン交流史に急遽変更し、スペイン、ポルトガルの取材旅行を行って帰国する。災害が転機となったとはいえ、日本と対外的な文化との交流を常々考えてきた杢太郎にとって、東西文化交流史は、いずれは取り組まなければならない問題であった。そして、そうしたテーマは、『木下杢太郎詩集』（1930年刊行）の挿図《無題（仮：古都のまぼろし）》となって画像化されている。

まさに好奇心旺盛なフマニストであり、さらに、美的感性に富んだ杢太郎は、享楽人らしい生き方で詩作に興じ、画作に打ち込んだ人生を送った。1945（昭和20）年、胃がんで死去。

今回は、杢太郎の日本と東洋文化、さらに西洋文化との関わりを思索し続けた杢太郎の軌跡を彼の残した二冊の詩集『食後の唄』（1919年）と『木下杢太郎詩集』（1930年）の挿絵

を通して浮かび上がらせてみたい。

### 【発表者プロフィール】

橋秀文（はし ひでぶみ）1954 年生まれ

早稲田大学大学院文学研究科博士課程を経て、1984 年、神奈川県立近代美術館勤務。2018 年 4 月から同館主任学芸員。『誌上のユートピア 近代日本の絵画と美術雑誌 1889-1915』展（2008 年）や『版画と彫刻による哀しみとユーモア 浜田知明の世界展』（2010 年）などの展覧会を担当。著書に『ドラクロワとシャセリオーの版画』編著（岩崎美術社/1995 年）、『岩波近代日本の美術 描かれたものがたり：美術と文学の共演』共著（岩波書店/1997 年）、『水彩画の歴史：カラー版』監修・執筆（美術出版社/2001 年）、『「戦争」が生んだ絵、奪った絵（とんぼの本）』共著（新潮社/2010 年）など。最近は、主に北原白秋や木下杢太郎の芸術を通して、美術と文学の関係をさぐる研究を続けている。